

阿部幸子著

「現代英国文学の諸相」

荒木文雄

「——結局において教化的でないような学問性は、まさしくそのことの故に非キリスト教的なのである。キリスト教的なるもの、一切の叙述は医者者の臨床講義に似たものを持っていなければならぬ——」

これはゼーレン・キエルケゴールの「死に至る病」の序にある言葉である。彼によると、「学問の超然たる英雄的精神なるものは非人間的な好奇心の一種」でしかないのである。

このことはキリスト教的観点を外して一般学問的態度にも適用されそうである。私は学者に、殊に文学を研究する学者に、もつと「人生に対する、すなわち人間的な現実に対する配慮」をもつて本を書いてもらいたいと願う。

この意味から「一つの時代を代表する作家群像をその時代との密接な関連づけの中に意味を探り共通の時代苦を受けとめ、かつ担った人々」をとり上げ、彼らの悩みの中から自身出口を見出すという著者の意図に共鳴を覚える。

著者はこのような意図をもって現代英国文学を研究していたが、一九六八年度渡航してその文学の生れた直接の環境の中で研

究の成果をたしかめた。著者の優秀な語学的才分がこの仕事を効果あるものとした。

私が特に興味を感じるのは「独創的な見解よりも如何に権威ある学者の書物に多く目を通していかとうことの方が研究者の優劣を定める規準とされたりしている」日本の英文研究に対する反骨精神である。このような精神が「現代英国文学の諸相」というような一見何の奇もない題名の書物を、何か生々しいものになっているようだ。

一九六八年ロンドン大学で開催されたサマー・スクールでの基準から戦後作家を撰訳し作家それぞれの傾向を探るのだが、共通していえることは現代の極限の中における人間関係に焦点がおかれているということだ。

ある経営評論家の言葉によると「サラリーマンの世界は閉ざされた世界であるということの中には本当の人間関係がないということがある。そこでの人間関係とは第一に仕事関係であり。権限関係であり、利害と打算による駆け引き関係である——そこからサラリーマンを救済し、本当の人間関係を再発見させる道はただ一つしかない——それは小説を読むことである——」

「現代英国文学の諸相」の著者の研究はこのような要求に答えるにふさわしいものである。著者は「宗教や道徳価値をはじめとして一切の価値の消滅が偉大な悲劇の誕生する基盤を奪い」その結果孤独、孤立、非合理の色彩をおびる一般ヨーロッパ文学の中からイギリスを取り出しその特殊性とリアリズムを追求する。

著者は戦後に書かれた代表作を二大別し、一見イギリスの伝統

を受けつぐもの、そうでないものにするが、無意味この二大別は更に細分される。この二類の中間的なものと見なす William Golding の *Lord of the Flies* について詳述しているが、飛行機の不時着によって辿りついた無人島での小学校の児童達の生活態度は興味がある。結局良識が実力派の前に敗北する事実が重視されているのだ。「大人の世界に繰り上げられる血と暴力の地獄図の縮図」。ここでゴールドディングは一人のモラリストとして「秩序と良識なき社会での悪の勝利を現代の社会における必然の現象として問題を提示しているのだ」と著者は考える。著者は第二のグループへ筆を進めて「彼らは伝統的価値体系からの完全な孤立、ないしはそれを意図したこと、旧価値崩壊後新価値誕生迄の間隙に低迷する人物像を新価値追求、絶望と孤立、人間不在と愛の不能のテーマに托して浮き彫りにした」作家達である。

ゴールドディングはある意味で「モラリストに違いないが、作品中に提起した道德的問題に対して明確な解答を拒んだ点」、従来寓話の特徴づけた教訓がない、C. P. Snow や Angus Wilson の場合に見られる明確な社会批判はない。「Malcolm Lowry は一貫性を失った断絶の社会における愛の運命」を語る。そして第二のグループにおいて「人間の愚かしさを笑う姿勢が優勢となり、「人生の馬鹿々々しさとコミュニケーションの不可能さ、人間の空虚さ」を独特の表現方法に托する Samuel Beckett に至る。著者はこれらの作家を他の欧州の作家、過去の作家と対照しながら解説し率直に線の太い自分の意見を述べる。

Evelyn Waugh や Iris Murdoch における現代のニーキア。

Lowry の悲劇。Graham Green や Waugh の宗教性。Golding のモラル。Alan Sillitoe の反抗——

小説が取扱う人間関係の中で特に男女関係の性的心理的追跡が重要なテーマとなる。著者は「愛の変遷」「姦通について」「性の倒錯」の諸章をもうけてこの面からも現代を追求する。私が最も興味をひかれるのは「最近のその世界は実に一切の意味を否定した冷たい抽象画の点と線の交錯する領域」であるベケットの世界である。「ベケットの如き全くユニークな作家は主題よりも文体を通してその特質を理解せねばならない」と著者は述べ、絵画における deformation に触れるが、この点については現代芸術における抽象の問題についてのハーバート・リードの鋭利な考察など参考になると思う。リードは、その写真と抽象に関する研究の中で「リアリズムは生の有機的過程に対する信頼と共感を表現する態度、肯定的な表現方式——（といっても必ずしも樂觀的な心境の表現にはならぬ。——人生の悲劇的要素を肯定することもある）——抽象主義は無の真淵に直面した人間の反抗であり、有機的な原理を信頼せず拒否しながらそうした状態にあっても人間の心意の自由を肯定する Angst の表現なのだ」という見解をとっている。

イギリスの行き詰った作家たちが日本の禅の思想、東洋的宗教観に惹かれていてという報告は新しいものではないが、危機迫る極限の世界を描写する現存の作家達の切実な言葉として新たに考へるべき要素を含んでいる。

(出所の記入のないカッコ中の句、文章は原書からの引用)